

あのときの常呂・写真館

VOL 140

(1993年)

平成5年8月1日

「花の聖水ワツカの水」 利用開始

▶「広報ところ」8月号では、「ワツカの水が飲めます」とタイトルを付け、「ワツカ原生花園は、周りをオホーツク海とサロマ湖という塩水で囲まれています。その中に唯一真水が湧くという神秘の泉があり…これを〈花の聖水ワツカの水〉と名付けてここを訪れる方々に…開放しますのでご利用ください。泉は…サロマ湖ワツカネイチャーセンターから約4.5キロの先端部方向にあります。また、その周辺には東京ところ会からの寄付金により、休憩用のあずま屋なども整備する予定」と紹介しています。

●北海道新聞(7/8付)では、「井戸の深さ3.5メートル、国有林内のキャンプ場跡地など約1ヘクタールを借り〈ワツカの森公園〉として整備」などと伝え、「現在の第1湖口が開削される以前、砂州は紋別方面に抜ける道路で、井戸水は通行人や馬の貴重な飲み水として使われていた」とも紹介しています。





*上・左
管理小屋・トイレ、表に昔懐かしき
井戸ポンプ
手前に「ワッカの水」の木柱

*下：あずま屋風の水飲み場





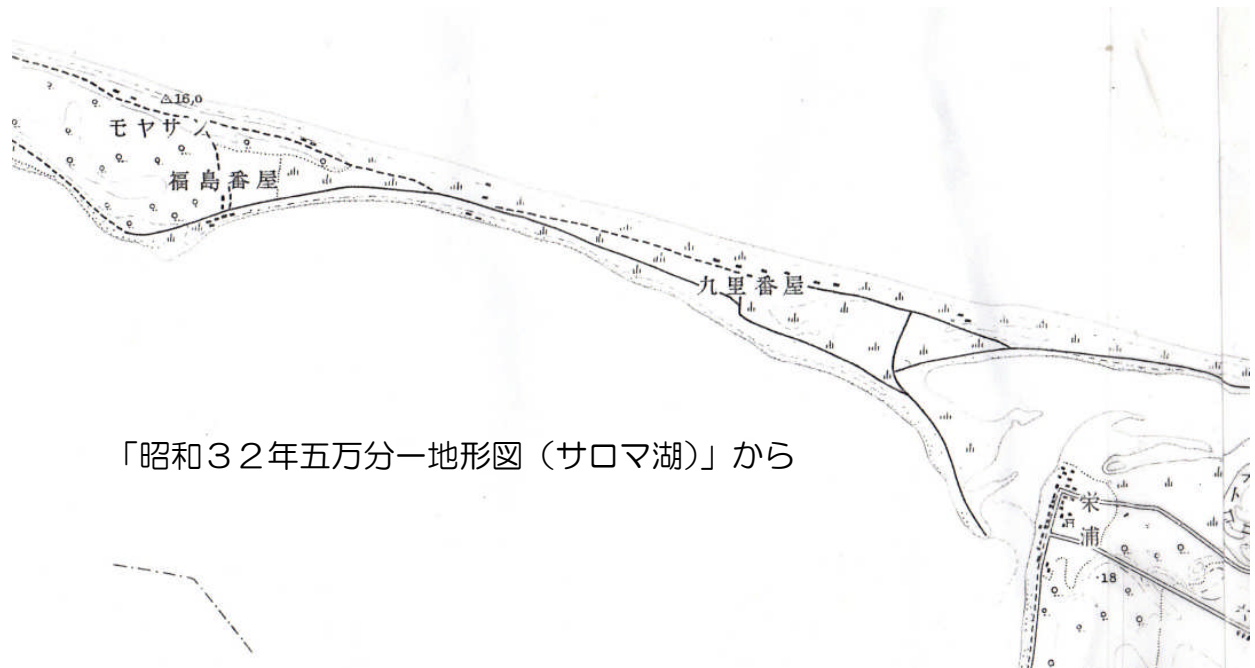
*広場のようになっています

●この場所については、『常呂町百年史』の「常呂町アイヌ語地名の記録」では、〈モヤサム〉の説明として、「今ワッカの森とよばれ、駐車場があってベンチの置かれているあたりは、湖岸がゆるやかになっている。明治30年5万分図は、そこにモヤサンと書いたが、モヤサム（入江の・奥）の意」と書いています。

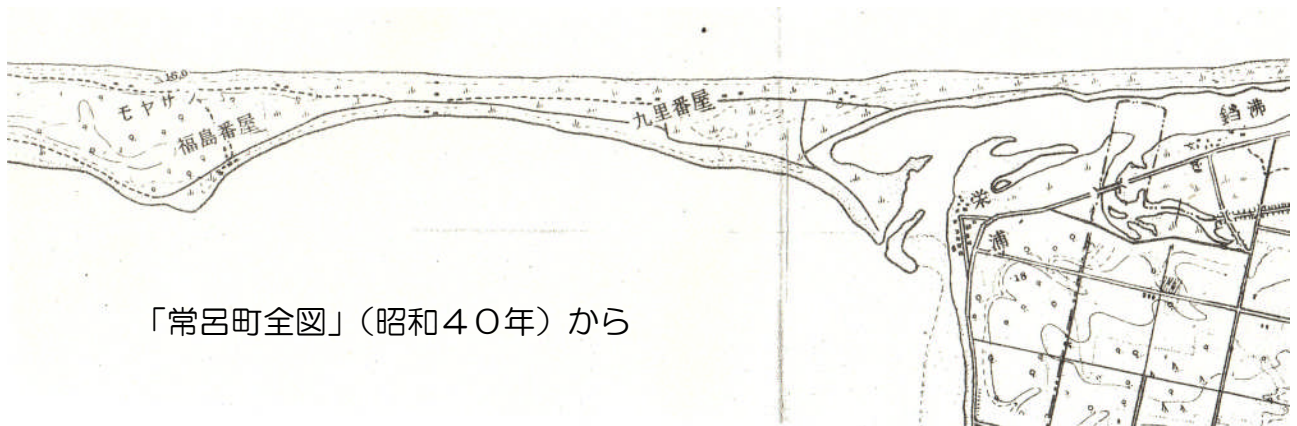
●ここにはかつて、「福島番屋」と呼ばれた漁師の番屋兼休憩場所（昭和32年「五万分一図（サロマ湖）」と昭和39年の「常呂町全図」参照）があり、その後キャンプ場として整備されたところです。

『常呂町百年史』の〈モヤサム〉の「駐車場…ベンチ」の記述は、このキャンプ場が使われなくなった後のようすと思われます。また、平成3年4月のワッカネイチャーセンターオープンとともにワッカ地区の町道廃止に伴い、この場所は車両の乗り入れ規制が始まり、徒歩または自転車での利用になりました。

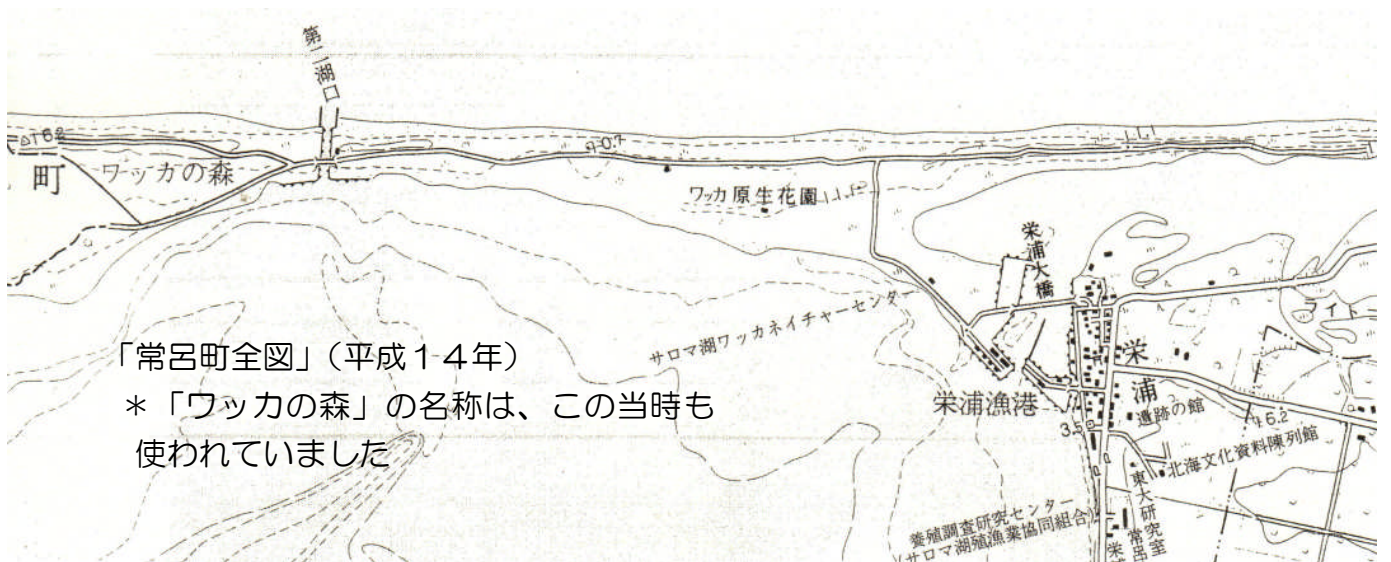




「昭和32年五万分一地形図（サロマ湖）」から



「常呂町全図」（昭和40年）から



「常呂町全図」（平成14年）

*「ワッカの森」の名称は、この当ても使われていました

*東京常呂会の寄付によって整備された「四阿（あすまや）」に関して、『東京常呂会30周年記念誌』（2008年11月発行）に詳細が記載されているので次ページに添付します。（四阿設置は、碑文から平成5年11月）



平成4年、清水会長、藤橋事務局長の下で、東京常呂会では常呂町開基110年記念事業の一環として、常呂町が推進していたワッカ原生花園の水のみ場整備計画に呼応する形で、常呂会としてもふるさとの為に何らかの貢献をしようという事で検討を重ねた結果、『四阿(あずまや)』を寄付することに決定しました。

ワッカに『四阿(あずまや)』を!

ワッカ原生花園は、オホーツク海とサロマ湖の間の砂州にあり、幅200〜300メートル、長さ20kmに及ぶ日本最大の原生花園です。雪解けの春から秋まで300種類の花が咲き乱れる自然の花園で、年間10万人の観光客が立ち寄る人気スポットでもあります。

そんなワッカ原生花園に観光客の方々の安らぎの場として『四阿(あずまや)』を寄付することには常呂町も大歓迎で水産商工課観光係と連携、常呂町の整備計画にも織り込んで頂くことになりました。

平成4年、同5年の総会で会員の皆さんから寄付を募りました。目標200万円に対し、135万円と目標には届きませんでしたが、多額の寄付金が寄せられ、幹事一同心を熱くしたものです。

常呂町からは東京常呂会の取り組みに

感謝を表し、平成5年5月23日に感謝状を頂きました。あれから15年経った、平成20年5月17日、幹事の有志でワッカ原生花園の『四阿(あずまや)』を訪ねました。

自転車で竜宮街道をまっすぐ、終点の『ワッカの水』の傍に、現在も立派な佇まいで憩いの場を提供していました。また、寄付した会員の方々の名前の刻印と共に「この『あずまや』は、ワッカ地区の自然環境の保全を願う、



この「あずまや」は、ワッカ地区の自然環境の保全を願う、東京常呂会の皆様のご寄附により建設されました。

東京常呂会 謹啓

平成5年(1993年)11月建設
常呂町開基110年記念事業

東京常呂会

感謝状

東京常呂会 殿

このたびは貴会の格別な御寄附により多額の金員を頂きましたこと、誠にありがとうございました。ここに深く感謝の意を表します。

平成5年5月23日
常呂町長 齊藤泰博

東京常呂会の皆様のご寄附により建設されました。」という碑が建てられていました。「同感無量の思いでありました。」